死の人工呼吸

川田弥一郎

Yaichirō Kawada

死の人工呼吸

川田弥一郎
Yaichirō Kawada

講談社

死の人工呼吸

一九九四年六月二五日　第一刷発行

著　者　川田弥一郎
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二―〇一
電話　（〇三）五三九五―三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五―三六一二（販売部）
（〇三）五三九五―三六一五（製作部）
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Yaichirō Kawada 1994, Printed in Japan

ISBN4-06-206988-1　（文2）

初出

炎天のランナー／小説現代　平成4年10月号
死の人工呼吸／週刊小説　平成5年4月30日号
眠りの恐怖／小説新潮　平成5年6月号
墜落／書下ろし
謎の食中毒／週刊小説／平成5年10月15日号
クリスマス・ランニング／書下ろし

この物語はフィクションであり、現実の人物、団体などとはいっさい関わりがありません。

目次

炎天のランナー……6
死の人工呼吸……58
眠りの恐怖……92
墜落……126
謎の食中毒……182
クリスマス・ランニング……222

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

装丁／辰巳四郎

死の人工呼吸

炎天のランナー

一

暑い！

右手に握り締めたハンカチで顔の汗を拭ってみても、焼け石に水であった。額から、頬から、すぐにまた汗が垂れてくる。水色のタンク・トップのランニング・シャツはぴたりと体に張りつき、安全ピンで胸に止めたピンクの布のゼッケンにまで汗が染みていた。

川本雅美は、前方を走る、オレンジ色のセパレーツのランニング・ウェアを着た女性との距離を眼で計った。約十メートル。ここ五分ほど、縮まってもいないし、開いてもいない。五キロメートルを過ぎた辺りから、雅美は彼女の小麦色の背中を目標にし、彼女のスプリット・タイムに合わせて走り続けてきた。

彼女のスプリット・タイムはほとんど落ちていない。この炎天の下、彼女についていくのは相当に苦しかった。体から水分が皆失われ、からからの日乾しになってしまいそうな気がする。だが、苦しいことは向こうだって同じはずなのだ。このペースを保てば、きっと勝てる。最後の一キロであのランナーを抜いてやる。雅美は心に念じて、走り続けた。

ランニングの大会に出始めた頃、雅美は最後の二キロほどで猛烈に追い上げ、ごぼう抜きする、『イブキマイカグラ』型で走っていた。これは気分はいいのだが、どうも力を余して敗けてしまうことが多かった。大体、十キロレースなどというのは、早いランナーにとっては全くの短距離で、前半のんびり走っているのは、それだけで勝負を投げてしまうようなものだった。そのことがわかってから、雅美は好位置待機の『トウカイテイオー』型にペース配分を切り替えた。早めに上位に上がり、中間その位置を保ち、最後で前のランナーとの勝負に賭ける。前のランナーを抜けるときも、そうでないときもあったが、これで雅美は、各地で行なわれるシティ・マラソンの大会の度に、五位までの入賞は確保できるようになった。

今日は、うだるような暑さに苦しみながらも、前半五キロで今の位置まで上がってきた。前のセパレーツのランナーはどうやら二位で、雅美は三位らしい。今日は二位が取れるかどうかが問題で、優勝は論外だった。セパレーツのランナーのずっと前を、かもしかのような足の、美しい女性ランナーが走っているはずである。商事会社のＯＬの彼女は、東海地方の市民ランナーの中では別格的存在で、出れば必ず優勝だった。完全な『ミホノブルボン』型の彼女は、今日も会場を出た時から先頭に立ち、他の女性ランナーには影を踏ませず、走り続けている。雅美の標的はあくまで、その後ろにいる、名前も顔も知らない、少し太った、セパレーツのランナー以外にない。

空にはふわふわした白い雲が浮かび、ぎらぎらした夏の日が照りつけている。風がほとんどないことが暑さをさらに増している。道路沿いには、愛知県の渥美半島ののどかな農村風景が続いていた。畑が連なり、ビニール・ハウスが点在し、時々雑木林が現われた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

女子十キロの前には、男性二十キロのランナー達が走っていた。ずっと前に出発した男性ランナー達は、途中で大回りのコースに入り、十キロ余分に走ってから、雅美達のコースに合流していた。暑さに敗れ、落伍した男性ランナーが道端をとぼとぼと歩いている。雅美は顔を見ることもなく抜いていった。思っていたほどに落伍者は多くはない。今日のレースは、この暑さを予想して、かなり体力のある者が集まっているようだった。無念の落伍ランナー達は、この女子十キロの最後尾を走っている収容車に拾われることになっていた。

左手前方にカメラを構えた若い男が立っていた。プロか？　マニアか？　誰を狙っているのか知らないが、汗まみれになってファインダーを覗き込んでいた。

前の女性ランナーが振り向いた。どちらかというと丸顔か。この状態では素顔はとてもわからない。ともかく、かなり苦しそうだった。苦しさの余り、後続との距離を確認したのだろう。雅美の全く知らない顔だった。愛知のランナーではない。関東か関西からやってきたシティ・マラソン荒らしのようだった。

彼女は雅美を一睨みしてから、また前を向いて走り始めた。意地のようになって、同じペースを保っている。だが、よく見ると、裸の背中にはかなりの汗が流れていた。膝の上がりも心持ち低くなったように感じられた。

左手に長いテーブルの給水所が現われた。前のランナーは乱暴に紙コップを取り、水を一気に口の中に流し込んだ。雅美も紙コップを取ったが、半分飲んで口の渇きを癒すだけにして、残りは頭からぶっかけた。

道は切断された山の間のような所へ入っていった。高く伸びた木で、少しの間日の光は遮られ

た。少し上り、同じだけ下って、また畑の間に出た。

前のランナーが後ろを向いてしまったことは、彼女の完全なミスであった。彼女が苦しがっていることが分かって、雅美はすっかり気が楽になった。雅美の経験では、最後の勝負を決めるのは体力よりも気力である。この先に待ち受けている心理戦に備えて、大変有利な材料を得たように思った。

また、前の方から男性ランナーが一人落伍してきた。黄緑と薄茶の横縞のランニング・シャツが体に張り付いている。まだ歩いてはいないが、かなり速度は落ちている。もはや止まる寸前の所を、余力を振り絞って、必死で走っているようだった。

雅美は彼を追い抜こうとした。だが、彼の余りに苦しそうな様子に驚き、速度を落として並走した。

男は四十代ぐらいだろうか。中肉中背。ゼッケンは白の百二番、四本の安全ピンで胸に留めている。髪は硬そうな黒で七三に分け、やや痩せ形の顔が苦痛に歪んでいる。顔はもう汗が出尽くしたような感じで、むしろ乾いている。色艶も悪く、暑がっているというよりも、寒さに震えているような感じがした。

それでも、男は走るのを止めようとしない。

「大丈夫ですか？」

雅美は男の苦しげな横顔に尋ねた。

男は黙って首を振った。雅美を安心させるように、うつむいていた顔を上げ、右手で前方を指差して、雅美に先に行くように促した。

雅美の心の中で二人の自分が闘った。看護婦としての自分は男にレースを止めさせるように命じていた。一方、ランナーとしての自分は余計なことをしないように命じていた。そして、前の女性ランナーのあとを追うように告げていた。

結局、ランナーの雅美が看護婦の雅美を押さえ込んだ。完走を目指している他のランナーに、止めろ、などとはランナーとして言えることではなかった。この人も子供ではない。だめだと思ったら、自分で止めるだろう。歩けなくなったとしても、いずれ収容車が来て拾ってくれる。

雅美は再び走り出した。前のセパレーツのランナーは雅美の視界から消えていた。こんなことであきらめるつもりはない。雅美はこれまで以上にペースを上げた。たちまち、息が苦しく、足が重くなった。かまわず走り続けた。

五十メートルほど先の角を左に曲がった。道は少し広くなった。後援の新聞社の小旗を持った若い女が角に立っていて、頑張って、と声をかけてくれた。

左手にビニール・ハウスの数が増えてきた。長方形の細長い建物が四つ五つ並んでいる。ジュースの自動販売機があり、雑木の列が垣根のようになっている所があった。そして、またビニール・ハウス。

前方にセパレーツのランナーの姿が見えてきた。さっきよりペースは落ちている。手の振りも、足の動きも、かなりぎこちなくなっていた。

とはいうものの、雅美の方ももう限界だった。足を投げ出して坐り込んでしまいたいほど体が疲れている。左の脇腹に差し込むような痛みが走った。

雅美はセパレーツのランナーの二十メートル後ろまで追い付いた所で、一気にペースを落とし

た。ゴールまであと二キロメートルを切っている。腹痛は少し和らいだ。どうにかこのペースを保って、彼女のあとからついていった。

道端に人家が増えてきた。メロンを売る売店も立っていた。子供や老人が並んで小旗を振ってくれる。あと一キロの表示を掲げて、女子高校生が立っていた。

最後の角を曲がった。左手にカンナの花壇が続き、南国らしいソテツの木が繁っていた。

ロープを張られた小学校の入口に来た。あと五百メートル、セパレーツのランナーが振り向いた。ここが勝負所だった。雅美は強引にスピードを上げた。グラウンドのトラックに入った所で、間隔は十メートルにまで縮まっていた。だが、セパレーツのランナーも必死でラスト・スパートをかけてきた。

心臓が強く締め付けられてきた。体力の限界に達した時の警報である。これ以上スピードを上げれば心臓が破裂し、バラバラになってしまうのではないか。

雅美は恐怖を振り払って走り続けた。少しずつ間隔が縮まっていく。やっとセパレーツのランナーを捕らえた。彼女も譲らない。しばらくは並走が続いた。

二十メートルほど前にゴールが見えてきた。大きなデジタル時計が秒を刻み、白いスーツの役員がカードを持って立っている。雅美は最後の力を振り絞った。隣のランナーの大きなため息が聞こえた。彼女は急に力を抜いたようで、姿が見えなくなった。雅美はそのまま走ってゴールに飛び込んだ。

二位のカードを受け取ったあとは、もう立っていることができなかった。

二

あとからゴール・インしたセパレーツのランナーが、もらってきたジュースを、雅美に一本分けてくれた。雅美は礼を言って、一気に飲み干した。液体が体の隅々まで染み通っていった。

「すごい根性ね。敗けたわ。あたし、笹岡真理」

セパレーツのランナーは微笑んで言った。こうやって見ると、彼女は意外とかわいい顔立ちをしていた。ぽっちゃりしていて、幼い感じで、若い男の子に持てそうなタイプである。

「ついていただけよ。どこから来たの？」

「横浜。これでも大学生。今は、名古屋の連れの家に泊まってる」

雅美は名古屋の東山公園の近くの総合病院に勤めていると自己紹介した。

「また一緒に走ろうね」

笹岡真理はそう言って雅美の手を握り、体育館の更衣所の方へ歩いていった。

雅美はそのまま、同僚の早田菜月の到着を待っていた。菜月はなかなか戻ってこなかった。濡れたタンク・トップが体に張り付き、寒いほどである。悪くすると、風邪を引いてしまいそうだった。

早田菜月の十キロの持ちタイムは雅美より十分以上遅い。それにしても遅すぎる。競馬の短波ラジオでも聞きながらのろのろ走っているのではないか、と雅美は疑った。

やっと小柄な菜月の姿がグラウンドに入ってきた。トラックだけはまじめに走って、二人追い

抜いた。
「大変！　雅美」
菜月は甲高(かんだか)い声で叫んで、雅美のそばにきた。
「どうしたのよ？」
「死んだの、男の人が」
「死んだ？　誰が」
「ランナー。男の人。百二番のゼッケン」
雅美は息が止まるほど驚いた。それはあの苦しがっていたランナーだ。
「どうして亡くなったの？　何の病気？」
「日射病だって」
菜月が早口で話したところでは……。
男が倒れたのは、最後から二番目の角を回って少し先の、ビニール・ハウスの前だった。菜月がそこまで来た時は、もう、ほかのランナー達が人工呼吸と心臓マッサージをやっていた。やがて収容車が来て、男を伊良湖(いらご)病院へ運んでいった。
「でも、あれはだめね。もう死んでたわ」
強い後悔の念が雅美の心を締め付けた。今にして思えば、男の苦しそうな顔はただごとではなかった。男に走るのを止めさせ、しばらく付いていてやるのが、自分の取るべき道ではなかったか？
「だけど、日射病ぐらいで亡くなるの？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.